

審査の和

巻・頭・言

特許庁技術懇話会 平成 22 年度常任幹事広報担当 安田 勇太



新年明けましておめでとうございます。今年、2011 年は、世界初の自動車が生誕して 125 年の記念の年だそうです。自動車といえば、今や日本を代表する一大産業となっていますが、皆さんは、2010 年、日本で一番売れた自動車の名前をご存知でしょうか？ 具体的な車名まで挙げることは控えますが、その車名の車種は、ハイブリッドカーだったそうです。自動車が誕生して 125 年の節目を迎える目前に、新しい技術を採用した自動車の販売台数がここまで増えているという事実、技術の進歩というのをまざまざと実感しているところです。

この技術革新の一翼を担う産業財産権制度も日本において、自動車誕生と時を前後した 2010 年、制度が確立されて 125 年の記念の年を迎えました。何か縁遠くないものを感じてしまいます。そして、幸運にもこの記念の年である 2010 年 4 月に私は、審査官に昇任することができました。産業財産権制度を支える一審査官として、心身共に引き締めていかなければならないと感じています。

さて、審査官に昇任したということは、審査業務を自立して行うようになります。この審査業務は、よく「マラソン」に例えられたりします。これまでその意味は、査定という判断に向けて、一步一步自分自身で見落としている点がないかを確認しながら、着実に進んでいくことにあると考えていました。しかし、先日、職場の先輩に誘われて始めて「マラソン」（ハーフ）に参加したことで、審査業務が「マラソン」に例えられることに、また違った意味も含まれているのではないかと考えるようになりました。それは、実際に長い道程を走ることで、周りからの声、一歩、歩を進める大きな力になっていることに気がついたからで

す。審査業務においても、周りの方からの助言が、次の一歩を前に踏み出す力になります。

周りの方から助言は、審査業務における種々の判断に迷い、自分以外の審査官と相談をして判断を決める時、もらうことになるかと思います。この相談をする際、当然ながら自分の信頼する審査官に相談をするかと思います。その時、相談される側の審査官も、相談に来た審査官を同じ位、信頼しているものです。こうした信頼関係という「和」で繋がった審査官の輪は、審査業務を進めていく上で、非常に重要な要素であると考えます。

ただ、現在、この審査官の輪というのは、関連した特許出願の審査経過からでは、担当審査官の顔・人柄が見えてこない等の要因により、多くの場合、ある技術分野内だけというまだまだ広がり狭いものとなっています。技術の高度化・多様化が進み、ある技術分野に属する技術だけでなく、技術分野を超えた多様な技術が用いられた特許出願に係る発明も、増えてきています。そうした中、審査官として高度な判断を行っていくには、技術分野の垣根も越え、審査官の輪を広げていく必要があるのではないのでしょうか。そして、国際的なワークシェアリングが進んでいる今、世界の特許庁間との国境という垣根も越え、審査官の輪をより広く、太くしていく必要があるのではないのでしょうか。

今号では、「世界の知的財産制度とそれを取り巻く環境」を特集しています。特集では、各国の知的財産制度の紹介に留まることなく、文化的な面にも重点をおいて紹介がされています。制度・文化両面を知ることで、各国審査官との輪を広げる一つのきっかけになると感じています。